SHALOM-NETWORK
発行：NPO法人シャローム事務局
〒960-1241 福島県福島市松川町字東原 17-3
TEL／FAX　024-567-5322
Web　http://www.nposhalom.net
Email　info@nposhalom.net
発行責任者：大竹静子

令和２年度 定時総会開催のお知らせ

コロナウィルス感染拡大防止のため
書面・委任状での総会

コロナウイルスの感染拡大を受けて緊急事態宣言が出され、全国が対象となり人の移動が自粛されています。年に一度の総会ですので、皆さんとお会いし、今年度の活動について話合いができればと考えておりましたが、感染は収束するどころか拡大を続けているようです。五月三十日(土)に定時総会を予定していましたが、福島市内でも病院の院内感染があり、皆さんに集まってもらっての総会の開催は自粛せざるを得ないとの判断をいたしました。

NPO法人の総会省略はできませんが、書面や磁気的記録による総会の開催も制度上可能とされています。**事前に書面で総会資料を正会員の方々へ郵送し、委任状を返送して頂くことで総会に替えさせて頂くこととといたします。**五月三十日付で委任状を集計し、理事会の承認を持って総会の開催といたします。

総会の議案については、定時総会のため以下の通りとなります。

①平成三十一年度（令和元年）の事業報告及び決算報告

②令和二年度の事業計画及び収支予算

平成三十一年が五月から令和へと変わり、年号とともに昨年のひまわりプロジェクトが本格的に動き出し、夏休みを中心にひまわり大使が全国を訪問することができました。その後のひまわりシンポジウムの開催など、一年間の活動記録が報告書「ひまわりプロジェクト。地域間交流事業報告書」としてまとめられ、三月三十一日に発行されています。また、昨年のひまわり感謝祭にあわせ「シャロームが学んだ『震災と原発事故』からの教訓ー地域共生社会と地方行政の役割ー」も発行されました。

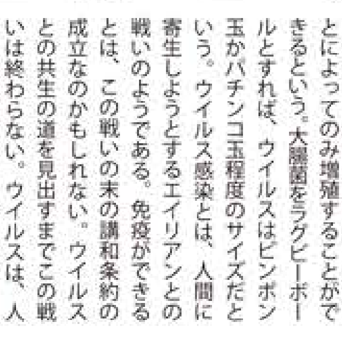
震災から十年目を迎え、客観的な再検討と教訓として何を後世に残さなければならないのかの整理が求められているものと思います。この冊子は、このための意味も込めてまとめられています。

今回のコロナウイルスに関連し、不安と差別の問題が生まれていますが、原発事故後の放射能差別、障がい者差別と重なります。自分で整理のつかない危険に対する不安は、不安をもたらすと思われる人々への批難と排除の行動を誘発します。排除の論理は、不安により増幅拡大し人間関係を分断していきます。

今年の事業計画は、コロナ終息の動向を見ながら検討せざるを得ない状況ですが、原発事故後の福島が学んだ十年の教訓は、これからの日本にとって重要な意味を持ってくるものと考えています。活動が制限される中にあって、「地元学」や「ひまわりプロジェクト」等について、動画配信などを積極的に活用していきたいと思います。

コロナに負けず、人と人との繋がりを大切にした活動を皆さんとともに拡大して行きたいと思いますので、今年度もよろしくお願いいたします。

（シャローム代表　大竹静子）



愛ウルメモ帳

コロナウィルスは、人の体に寄生し増殖を続けている。政府は全国に緊急事態宣言を拡大し人の移動を抑制することに躍起となっている。人は集団で助け合いながら社会を営んできた。その人間関係が感染を広げる環境を作るとして、その関わりを分断することで拡大を抑えようとしている。それは相矛盾する難問への挑戦のようである。

なぜか政治家が感染者の確認を記者会見で報告する。確認の検査は行政機関が独占する。医療崩壊を防ぐためであるという。インフルエンザのように、誰もが感染する状況となっている中でも、外部からの感染を食い止めるための水際作戦が継続されている。感染者の早期発見、早期治療を優先する医療体制を支援する経済対策が優先しないと不安は増幅するばかりである。政治・医療・国民生活、コロナウィルスは、個々の体だけでなく社会全体を大きく蝕んでいく。

ウイルスは、細胞に寄生することによってのみ増殖することができるという。大腸菌をラグビーボールとすれば、ウイルスはピンポン玉かパチンコ玉程度のサイズだという。ウイルス感染とは、人間に寄生しようとするエイリアンとの戦いのようである。免疫ができるとは、この戦いの末の講和条約の成立なのかもしれない。ウイルスとの共生の道を見出すまでこの戦いは終わらない。ウイルスは、人間社会に排除から共生への転換を求めているように思える。（T・O）

ひまわりプロジェクト2020

2020年度が始まりました

令和二年度・二〇二〇年度がスタートしました。しかし昨年度末からの新型コロナ問題で社会情勢が大きく変わり、波乱の幕開けとなっています。放射能汚染と同じく目に見えない相手であり、今回は感染の不安があり、ますます活動を自粛させる結果となっています。皆さまがお住まいの地域ではいかがでしょうか？どうぞご自愛頂き、お健やかにお過ごしくださいますように。

こうした中においても、全国で多くの皆様が「ひまわり栽培」にご協力下さり、大変有難く感じております。「種の配布式が出来ない」というお悩み、栽培を通じた「親睦の機会が失われる」という寂しさ・・・。こうした不安を越えて、やがて芽を出し、花を咲かせてくれる自然の営み。疑心暗鬼や恐れが広がる中にあっても、変わらぬ生命の営みを続ける植物から、私たちは再生への新しい力を分けてもらいたいものだと思います。

休校となっている高校では、先生が自ら花壇を整備して下さっています。「配布式は出来ないけど、こうしたときだからこそ種を分け合い、協力したい」と言って下さる生活クラブ生協の職員さん。毎回、広い範囲で栽培協力を呼び掛けて下さっているグリーンコープ生活協同組合さんからは、百三十二もの事業所・部署の方からお申し出を頂戴しました。遊休農地を利活用するために種を蒔いて下さる地域。高校、小中学校、幼稚園・保育園での取り組み。そうした教育機関を結んで連携を深めて下さる市民団体の皆さま。高齢者福祉施設で栽培を療養に結び付けて下さっている方々。もちろん、ご家庭で育てて下さる沢山の個人の皆さま。湘南学園中高の生徒さんは、紙芝居を作り、幼稚園の子どもたちに「ひまわりプロジェクト」を読み聞かせてくれています。都立深沢高校家庭科部の皆さんは、昨年度の都内会議でひまわりプロジェクトをご紹介下さり、今年度はますます新しい輪が広がっています。都立大島高校の皆さんはそうした輪に加わって下さいましたが、なんと福島への修学旅行を計画中と伺いました。新型コロナが収まり、無事に実施されますこと、また、福島で皆さんにお会いできますことを切に願っております。

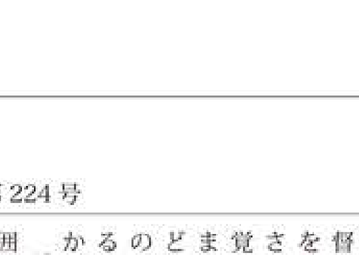
昨年末に実施しました「ひまわり感謝祭」では、地域間相互交流発信事業（福島県助成事業）の一環でシンポジウムを開催しました。山口・岡山・兵庫・広島・神奈川・埼玉と、ひまわり大使を受け入れて下さった皆様が参集。そのパネラーで、プロの農家として栽培にご協力下さっている大平成晴さん（鎌倉市：大平農園）からは「上手な苗の育て方」を教えて頂きました。ご自身で資料を作成くださいましたので、皆さまにご紹介したいと思います。

東日本大震災と原発事故に端を発し、福島の子どもたちや障がいを持つ仲間たちに寄り添って下さる皆さま。そして今では、お育て下さる皆さまがお住まいの地域で交流の機会づくりや園芸療法など、様々な意味を広げて頂いている「ひまわりプロジェクト」。今年度もご理解・ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

（ひまわりPJ事務局・吉野）

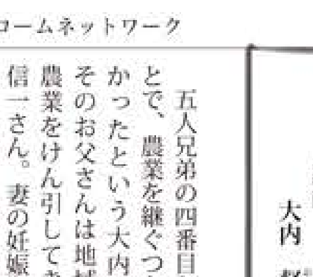
ただいま、絶賛受付中！種を植えて下さる方を募集中です！

シャローム福祉会ベーシック憩の利用者さん・職員さんたちが、ひとつひとつの工程をよく考えながら、丁寧に発送作業をして下さっています。一粒ひと粒を数えながらの作業は大変！なのですが、新型コロナが心配される中だから猶のこと、全国で栽培に手を挙げて下さる皆さまを思い浮かべながら、感謝の気持ちで準備をしてくれています！


ひまわりプロジェクト
みんなのせんべい

ひまわりを植えてくださった全国の皆さまのご協力で製造されたひまわりオイル「みんなの手」。この貴重なオイルを配合したせんべい「みんなのせんべい」ができました。
詳しくはひまわりPJ事務局までお問い合わせください！
TEL 024-563-1680　MAIL info@nposhalom.net

ご予約承ります！
プロジェクト紹介のリーフレット付き。ひまわりプロジェクトの紹介ツールとしても活躍します。



箱入り（16袋／32枚入）　1,000円
袋入り（8袋／16枚入）　500円

ブログ更新中！

「ひまわりプロジェクト」
URL
http://shalom-net.jp/?cat=16
＊現在、ブログのアドレスがベーシック憩HP内に移動しております。

ひまわり栽培のお役立ち情報や栽培協力者さんとの交流報告などシャロームのさまざまな取組みを発信しています。
ぜひご覧ください！

教養講座 地元学を考える

第百九十五回「地元学を考える」（二〇二〇年三月二十八日開催）

「父から継いだ有機農業～未来へ希望つないで～」

講師　大内 督さん

五人兄弟の四番目ということで、農業を継ぐつもりは無かったという大内督さん。そのお父さんは地域の有機農業をけん引してきた大内信一さん。妻の妊娠期、農薬による健康被害を感じ取った信一さんは近代農業（化学肥料や農薬の大量投入）に疑問を持ち、有機農業に関わったとのこと。七十年代から全国の先駆者を二本松に招き、勉強会を重ねてきたそうです。督さんも最初の就職先で身体を壊したことから農業に転換され、親子で身土不二の感覚が根付いている事を感じました。しかしその督さん、どこに行っても「信一さんの息子」という目で見られるため、集まりには出たくなかったとのこと。

試行錯誤を重ね、次第に周囲の理解を得ながらお客さんもついてきた一九七八年、二本松有機農業研究会は立ち上げられました。農協の部会という特殊な立ち位置ながらも、顔と顔の見える関係を大事にして信頼感を築いてきました。提携商品として十種類前後の野菜に卵を入れた「野菜セット」を、福島・郡山など三十㎞県内に届けました。消費者は買うだけではなく「援農」で畑に足を運び、野菜がどう育つのかを見ることで理解を深め、葉先がボロボロになった野菜も納得して受け入れてくれるようになりました。生産者と消費者が一緒になって環境を保全しているという意識が嬉しかったそうです。

ちょうど中国産野菜の偽装問題が顕在化し、消費者が有機野菜に関心を高めた二〇〇六年、有機推進法が出来ました。当時の佐藤栄佐久知事が全国で初めて、県庁に「有機農業推進室」を立ち上げました。彼がもっと知事を続けていたら、福島県の有機農業はもっと進んでいたのではないかと思います。安心な野菜や米を求める方が増え、売るものが足りないくらいの評判になったそうです。

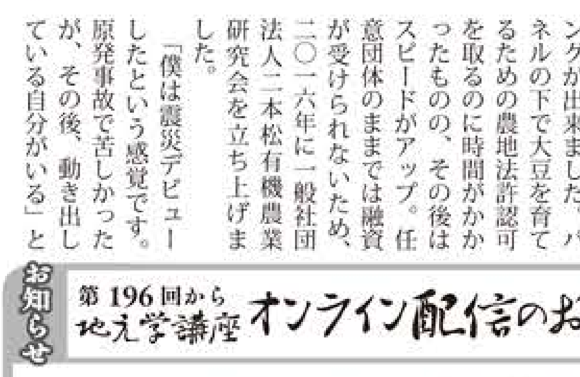
二〇一一年の原発事後。有機農業がこれからますます盛んになろうとしていた矢先の出来事でした。環境意識の高い消費者ほど、放射能汚染への不安が高いということもあり、六割のお客さんが離れていったそうです。農業をやめる人もおり、大内さんも「福島で農業はできないのではないか？」と考えたそうです。そうした中、父親の信一さんはひょいひょいと野菜を植えたり種を蒔いたりしていました。トラクターを使うことでほこりが舞い、周辺に迷惑をかけると批判されつつも静かに種を植え続けました。「やってみなければ分からない」というスタンスで。

すると、東京大、新潟大、東京農大などの研究者が足繁く通って、野菜を測定して研究してくれました。父の野菜から放射能は出ませんでした。今まで有機農法で丹念に作って来た肥沃な土壌だからこそ、野菜はセシウムではなく、土壌から栄養を吸収していました。出口対策を「測って、ダメなものは出さない」というスタンスに決め、お客さんに説明し、判断してもらう販売方法を取りました。「大内さん家で食べてるんでしょ？」の一言で買ってくれる人がいました。励ましてもらって嬉しかったそうです。放射能汚染の不安から選んだ西の方の（鮮度が落ちた）野菜よりも、地元有機栽培の野菜は美味いことに気づくお客さん。郡山のアイコープ福島ではより厳密なゲルマニウム半導体測定器で測定し、震災後二～三年後には地元野菜に切り替えた「愛菜箱」の出荷が伸びています。

二〇一二年、特定非営利活動法人APLAと共同で「福島百年未来塾」を開催。有機農業の大切さを説きました。「しかし自分はエネルギーに無頓着だった。国と東電の言う安全神話をうのみにしてしまった反省がある」と大内さん。野菜の自給率向上＝エネルギーも同様に！とエネルギー部会を作りました。当初はバイオマス発電を検討しつつも初期投資と継続の負担から断念。当初、処分方法が無い素材に疑問を感じ、ソーラー発電には反対だったものの、ISEP（環境エネルギー政策研究所）の飯田さんに「成功例を取り入れないと仲間は集まらない」とアドバイスを受けました。二〇一五年、ソーラーシェアリングに出会いました。もともと農地は開けた場所に作ってある。ということは、太陽光発電に最適。先駆者である方の建設を手伝ってノウハウを身に着けました。建設費用を抑え、農閑期の副収入にもなると考えたそうです。

APLAはパネルサポーターを募り、一口七千円で一六二枚分を集めてくれました。総工費一六二〇万のうち四八三万円はサポーターからの資金。みんなの思いが入ってのソーラーシェアリングが出来ました。パネルの下で大豆を育てるための農地法許認可を取るのに時間がかかったものの、その後はスピードがアップ。任意団体のままでは融資が受けられないため、二〇一六年に一般社団法人二本松有機農業研究会を立ち上げました。

「僕は震災デビューしたという感覚です。原発事故で苦しかったが、その後、動き出している自分がいる」と語る大内さん。現在の会員は十五名。十六haの認証圃場となっています。大手流通と付き合うためにも、小量に絞って品種を確保しています。好評の有機にんじんを使い、ビタミンCが豊富な有機にんじんを使ったジュースが好評です。今後の課題としては、提携先の消費者が少なくなったこと。「単品種で増量栽培＋多品目セット販売を行いたい。新規就農者の指導・育成、販売先の紹介も行っていきたい」と語る大内さんは自信に満ち、とても頼もしい農家さんだと感じました。お嫁さん募集中とのことです。（H・Y）



▲有機にんじんジュースを紹介する大内さん（画面右）。

お知らせ　第196回から地元学講座オンライン配信のお知らせ

新型コロナウィルス感染拡大防止対策として、**地元学講座は次回（第196回）開催分より当面の間はまちなか夢工房での開催を休止し、オンライン配信の形式を取らせていただきます。**NPO法人シャロームのホームページから無料で講座を視聴いただけるよう準備を進めております。詳細は後日HP等にてお知らせいたします。また、第196回講座の開催日につきましては5月9日を予定しておりましたが、延期させていただきます。
何卒ご了承くださいますよう、よろしくお願いいたします。

活動のご報告

2020年2月26日～4月25日

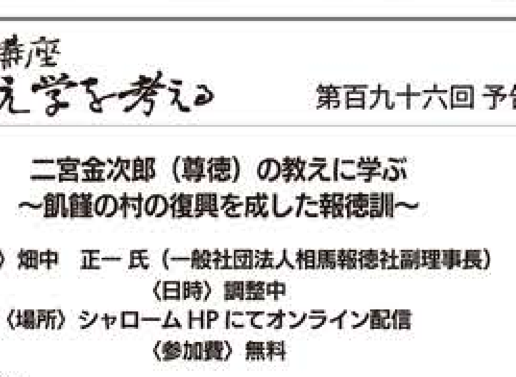
2月26日	夢工房　福島市農福連携説明会 参加 憩〈納品〉授産事業振興会
2月28日	事務局〈ひまわり交流〉：生活クラブ生協様来福　ひまわりせんべい工場見学
3月5日～	夢工房　BLTカフェコラボランチボックス発売
3月9日	憩　市立養護学校中等部見学対応
3月10日	地域福祉ネットワーク会議　年度末総会
3月11～17日	楽膳〈催事販売〉大丸東京店（東京都）
3月13日	憩　市立養護学校高等部見学対応
3月16日	地域福祉　移動支援運転者講習会実施
3月22日	夢工房〈イベント〉ペイフォワードカフェ参加
3月26日	事務局・憩〈ひまわり交流〉：ひまわり大使交流会開催（ベーシック憩）
3月28日	第195回　地元学講座 「父から継いだ有機農業 ～未来へ希望つないで～」 講師　大内督さん
4月1日	地域福祉「県北地区福祉事業所情報共有HP」運営開始
4月20日	地域福祉　農福連携現地見学会開催
4月22日～5月6日	夢工房・憩　営業自粛 （コロナウィルス感染防止のため）

活動予定

2020年4月26日～5月25日

5月2～6日　楽膳　ゴールデンウィーク休業

新型コロナウィルス感染拡大に伴い
5月の各種会合、イベント、販売会等は
中止・延期となっております。


てをあらおう
しょうどくしよう
うがいをしよう
マスクをしよう
かんきをしよう
うちですごそう

アルミ缶収集ご協力の御礼

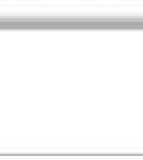
今年もシャロームの活動にご協力をいただき感謝申しあげます。

シャロームは「障がいを持つ人も持たない人も、共に生きる地域づくり」を目指して具体的な活動を展開しています。

そんな中、「アルミ缶」を集めて資金的な活動の支えをいただきました事業所や医院、商店、個人の皆さま、今年もありがとうございました。

（福島市）
・ホテル板倉様
・旅館山根荘様
・母袋笙子様

（二本松市）
・渡辺医院様
（大玉村）
・佐々木早苗様



教養講座 地元学を考える　第百九十六回 予告

二宮金次郎（尊徳）の教えに学ぶ～飢饉の村の復興を成した報徳訓～

〈講師〉畑中　正一 氏（一般社団法人相馬報徳社副理事長）
〈日時〉調整中
〈場所〉シャロームHPにてオンライン配信
〈参加費〉無料

＜講演内容＞
小学校の校庭に必ずと言っていいほどあった二宮金治郎像。薪を背負って勉学に励んだ少年が、その後飢饉等苦しむ村など、600以上もの復興事業を手がけたことご存じだったでしょうか？200年前に金次郎が辿り、着き守り抜いた思想の数々は、日本的経営の源流として、安田善次郎、渋沢栄一、松下幸之助など日本の経営者・実業家に大きな影響を与え続けていたのです。誰もが幼き頃会っていた金次郎の像が、現実に皆さまの前で生きてくださると信じております。当日は、たくさんの教えや語録など紹介しながらお話を進めます。

＜講師プロフィール＞
昭和34年　福島県相馬市生まれ。相馬高校、明治大学政治経済学部卒業。
昭和56年　厚労省外郭団体雇用促進事業団（現：独立行政法人高齢・障害・休職者支援機構）勤務
平成31年　機構を退職。この間38年、人材育成業務に携わり、総務、経理、人事労務全般を担当。
また、陽明学をベースに論語等四書五経の他、報徳仕法を学ぶ。
東日本大震災時、宮城県仙台港の産業道路を走行中大津波に遭遇。同僚10名と共に奇跡的に脱出。震災以降、職場の兼職承認を得て、一般社団法人相馬報徳社、NPO法人相双歴史文化保存会を設立し、震災復興支援に取り組む。

＊講演を撮影し、シャロームHPにてオンライン配信いたします。配信時期は6月を予定しております。詳しくはシャロームHP等でお知らせいたします。

編集後記

新型コロナウィルスの感染拡大で外出を控えているものの、外の空気を吸いたくて時々散歩に行きます。車社会の福島は歩いて移動する人が少なくて、近所の河原を散歩しても殆ど人とすれ違わない。こんなかたちで地方で良かったと思う日がくるとは。桜並木に沿って河沿いを散歩したりしていると、桜の種類はソメイヨシノ以外にもたくさんあると知ったり、雑草や野の花がとても美しい造形をしていると気づいたり。桜吹雪に遭遇した時の幸福感。野の花は紫の色素が多いな。道路の植栽の新芽は緑じゃなくて真っ赤だ、とか。とりとめのないことをぼんやり考えながら散歩する時間は思いがけなく豊かな時間で、子どもの頃以来で身近な自然の美しさを再発見しています。（A・O）